

ゴンザレス的海外旅行

ゴンザレス三上

ゴンザレスすみかみ / 1953年大阪生まれ。ギタリスト。ギターデュオ「ゴンチチ」として広く知られる。CGやグラフィックデザイン分野でも独自の活動を展開。著書に『犬と暮らす人の生活』(メディアファクトリー)。最新ソロアルバムに「green shadow, white door」(In The Garden Records)がある。

元来、家のなかが好き。加えて、飛行機嫌いの旅嫌い。むかしから、一日中家にいて、音楽を聴いたりテレビを観たりゲームをしたりして、ゴロゴロしているのがいちばん幸せ、な僕にとつて、自ら望んで「世界の国々へ羽ばたこう」なんて大志を抱いたことは一度もありません。

とはいえ、ゴンチチを始めてから、演奏旅行などで、ちょこちょこと外国へ行く機会が増えました。今年でデビュー二四年。思い返して数えてみると、今まで、かなりの回数海外に出かけています。

もつとも、プライベートで行ったことは一度も無く仕事ばかりです。いわゆる、仕事で行く海外ですから、どちらかと言うと、自費を捻出して、強い期待に胸膨らませて行くというのとはちよつと様相が違います。なので、当地に着いても、比較的冷静なものです。それに事前勉強などして当地の知識に長けているなんてこともなく、また有名スポットもわからず、ただ、仕事以外のちよつとした空き時間に町をさまよう程度の海外旅行なのです。旅行好きの方からすれば、言語道断、まったくもつて、もつたない、けしからん旅行者なのかもしれません。

けれど、反論する訳では無いですが、何の期待も無く、何の知識も無い、という二つを逆にとらえれば、それは、

まったく偏見無しに旅行できる、ということでもありません。つまり、事前準備の無い分、その驚きと感動の度合いは相当なものです。だから、南仏からTGV(高速列車)に乗り、パリに向かう車窓で、まるでルーブルの美しい絵画(それ以上ですが)のような景色が数珠繋ぎになつて延々と続くのを見たときは、あまりの美しさに本当に膝が震えましたし、スペインはバルセロナの、有名なガウディの建物のあいだからのぞく、美しい陽光と青い空を見た瞬間は、もつこつで命果てても仕方無し、と思えるほど純粹に感動することができたのです。

海外旅行を偉そうに語れる資格なんてまったく無い僕が言つのも変ですが、「世界は広い、見たことも無い美しい場所が無数にある」ということだけは言えそうです。そしてそついつとさまざまに美しい無数の場所に住む人びとと出会うというのも、海外の旅のもつとも重要な要素、醍醐味かもしれません。

さて、ここ数年、僕は新幹線から時折見える、富士山の雄大で美しい姿に心惹かれています。ひよつとして、海外の美しい景観を見ていながつたら、僕は、富士山の美しさにたどり着かなかつたのかもしれない。

皮肉なことに、本当の日本の美は、海外の景色の向こうにあります。人は自分の国を知りたくて、世界に向かうのかもしれない。



目次

MAY 2007
月刊みんぱく 5

01 エッセイ 世界へ世界から
ゴンザレス的海外旅行
ゴンザレス三上

02 特集 ダンス

「社交ダンス」の風景
永井 良和
村のダンスと舞踊団
遠藤 保子
舞踊の伝承
福岡 まどか

鳥になる

甲地 利恵
「ヨガック」でもてなし
久保田 亮
踊り継がれる「スイカ・ダンス」
丸山 淳子

08 モノ・グラフ
飛行祈願 — 機械文明と呪具舞踏 —
近藤 雅樹

10 地球ミュージアム紀行
死海を望むミュージアム
日高 真吾

11 表紙王 / 語り
クメール舞踊の冠
福岡 正太

12 みんぱくインフォメーション

14 万国津々浦々
タッチからタッチングへ
廣瀬 浩二郎

15 時論・新論・理想論
漫画漫談一独逸編
山中 由里子

16 外国人として生きる
日本でのムスリム
エルハジマルブルク 友美

18 地球を集める
聖母マリアとヒツジたち
新免 光比呂

20 生きもの博物館
ウサギのいる風景
田口 洋美

22 フィールドで考える
赤い土、白い砂、青い陶器
菊田 悠

24 開館30周年記念事業
みんぱく ウィークエンド・サロン
研究者と話そう
次号予告・編集後記